

初級レベルの外国語としての英語教科書に あらわれる生活語彙について

—日本の教科書とドイツの教科書の比較—

広島大学大学院 佐々木 みゆき

0. Introduction

「外国語としての英語教育」しかも、「10才を越えてからのスタート」(稲村1970:10)という特殊事情のため、日本の中学校英語教科書には身近な事柄や現象をあらわす語が少ないと言われるが、本当だろうか。このような問題意識を持って、筆者は、同じような背景を持つと思われる日本とドイツの英語教育に使われている初級英語教科書に出現する語彙を比較することにした。以下、コロンビア大学の J. Noah とニューヨーク市立大学の M. A. Eckstein の比較分析の手順(1969)に従って論を進める。^{注)}

1. 仮説の定立

日本とドイツの初等外国語教育の目標はそれぞれ、

外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養うとともに、言語に対する関心を深め、外国の人々の生活やものの見方などについて基礎的な理解を得させる。

(昭和56年度から実施の中学校学習指導要領)

2.4.2. Kommunikative Kompetenz als ubergeordnetes Lernziel im Fremdsprachenunterricht

Kommunikation geschieht durch sprachliches und parasprachliches Verhalten. Sie kann beabsichtigt oder unbeabsichtigt sein. Im Sprachunterricht spielen unbeabsichtigte Mitteilungen nur eine geringe Rolle, der Akzent liegt auf der Befähigung der Schüler zu beabsichtigter sprachlicher Kommunikation. . . .

(ヘッセン州文部省, 中等教育第1段階 現代語大綱基準P23)

と、ともに、“communicative competence”(外国語で表現する力)の育成を最大目標の1つとして掲げているが、語彙レベルの教材の内容も似通ったものだろうか。従来言われているように、日本の教科書には、“身近な語”がより少ないのではないだろうか。それは、日本人の生徒が、身近なことを英語で満足に言えないという西田(1983:66-67)の指摘の裏付けにはならないだろうか。

以上のような論点から、次に示す仮説が立てられた。

「初級英語教育において同じような目標を掲げている国であっても、身近なことを表わす語——ここで生活語として定義されているもの——が教科書に含まれている割合は違い、日本の教科書は、ドイツの教科書よりその割合が低い」

2. 事例の選択

事例の数は多いほどよい(沖原1982:109)が、語彙調査は手順が煩雑なため、まず1国を選ん

注) 沖原(1982:106-114)による。

で、日本の教科書と比較することにする。入手し得る教科書のうち、タイのものは先行研究 (Sompong 1981) があるので、ここでは、同じような英語教育の背景 (外国語としての英語教育) を持つ国として、ドイツを選んだ。

3. 概念の明確化と指標化

上述の仮説のうち、明確化、すなわち定義が必要なのは、「初級英語教育」と「生活語」と思われる。

「初級英語教育」：本研究においては、「初級英語教育」は、日本の中学校段階3年間に相当する授業時間数において行なわれる、公教育における英語教育 (週平均3時間) と定義する。ドイツでは、英語教育は小学校5年生の段階から始まり、週平均5時間を授業時間数とする (広島大学教育学部英語教育研究室1972: 27) ので、日本の英語教育の「初等」にあたる時期は、最初の2年間に相当すると思われる。

「生活語」：本研究では、吉田 (1975) のフランスの英語教科書の分析を参考に、「生徒の生活場面に密着しているか、あるいは欧米の子どもの生活に身近なもの」 (吉田1975: 15-16) として定義する。この定義に従えば、「生活語」の大半は、第1言語 (母国語) においては、幼児期又は児童期に習得されるものと思われる。そこで、生活語の指標として、幼児期、児童期をカバーする早期英語教育の教材『リングフォン子ども英会話』 (リングフォン協会), *English with Jacks & Jill* (セイドー外国語研究所), 『広島YMCA 英語幼稚園教師用語彙表』の3つの教材の語彙をとりあげた。これら3つの教材における語彙選択の基準は、「……アメリカで同じ年齢の子どもたちが経験するようなアメリカの文化に子どもたちが接するようにしてやること」 (リングフォン子ども英会話, おかあさんの手びき p12), 「……子どもたちが言葉で表現したがる事柄を繰り返して練習し, 正しい言語習慣の基礎を身につけさせて……」 (*English with Jack & Jill*, 教え方ガイド p3) などとなっていて、英語を母国語とする子どもの言語環境に、他のどんな英語教育の教材よりも近いこと、しかし、たとえばアメリカの子どもたちには必要な語であっても、英語を外国語として学ぶ日本の子どもたちには必要でない語は、含まれていないこと、又、3つを合わせた語彙のサイズが比較の対象に匹敵することが、これら早期英語教育の教材を、指標として選んだ理由である。

4. データの収集

現在日本の中学校では5種類15冊の教科書が使用されているが、この調査では、そのうち合わせて75%のシェアを占める (上野1982: 141) 東京書籍の *New Horizon English Course 1-3* 3冊と、開隆堂の *New Prince English Course 1-3* 3冊にあらわれる単語をデータとして使った。

一方、ドイツの教科書は、日本の英語教育事情に最も近い目標を持つ、ギムナジウム向け英語教科書 *Learning English Teil 1* (Ernst Klett Verlag 社刊, 小学校5~6年生用) の語彙を比較のため、使うことにした。ここで、「日本の英語教育事情に最も近い目標を持つ」と書いたのは、ギムナジウムに通うことのできる生徒は、全体のわずか18%を占める (広島大学教育学部英語教育研究室1972: 26) にすぎないが、それが大学就学のための普通教育を施す準備機関であること、日本の中学生の半数以上が、後に何らかの形で高等教育機関に進学する事実を考えあわせたためである。

5. 結果

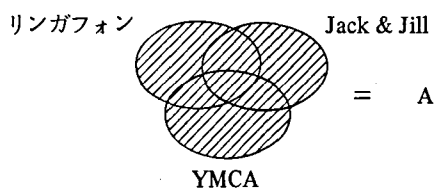
① 総異語数

それぞれのテキストにあらわれる各単語 (Exercise, 詩等を除く本文からのもの) をコンピュータに打ち込んだところ、以下のように、各テキストの総異語数を得ることができた。尚、語の数は、字列語彙による。

テキスト名	ニュー ホライズン	ニュー プリンス	Learning English	リングフォン	Jack & Jill	YMCA
総異語数	1,320	1,331	1,619	349	1,480	155

② 日独の教科書と早期英語教育の教材の交わり

(リングフォン) U (Jack & Jill) U (YMCA), すなわち、早期英語教育の3つの教材のいずれかに出てくる単語の集合を A (図1参) とすると、日本の教科書2種類6冊と、ドイツの教科書1種類1冊にあらわれる語の交わりは、下記の通りである。



テキスト名	ニュー ホライズン	ニュー プリンス	Jack & Jill
Aとの交わり の語数	466	465	523
Aとの交わり が総異語数に 占める割合	35.3%	34.9%	32.3%

図1 集合

6. 考察

以上の結果をみてみると、日本の教科書の語彙と早期英語教育の教材に出現する語彙 (集合 A) の交わりの割合は、ドイツの教科書と早期英語教育の交わりの割合とほぼ同じ、むしろ前者の方が高いくらいで、仮説は検証されなかった。しかし、交わりの総語数から言えば、ドイツの教科書の方が、日本の教科書より60語ほど多く、どちらの交わりも一定量は必ず含まれると思われる機能語を両方の交わりから引けば、残りの内容語の全体に占める割合は、ドイツの教科書の方が、日本の教科書より多いと思われる。

又、ドイツの教科書の方が、日本の教科書より、早期英語教育の教材との交わりが約60語多いというこの事実は、このことだけで、日本の教科書には、ドイツの教科書には載っている身近な事柄を表す語が欠けているということを示している。たとえば、ニューホライズンにおいて、この欠けている語の中には、以下のような重要で基礎的と思われる語も含まれていた。

arm, bathroom, bottle, cheek, clothes, cool, desk, doctor, dry, egg, finger, fire, grandmother (father), grass, jacket, key, light, potato, ruler, scissors, shirt, shoulder, sock, sugar, tea, thick, thin, wet, wrong

これは、タイの教科書との比較において、Sompong (1981) が指摘したこととも相通ずる。

生活語がどのくらい、又、なぜ必要かは、別の論を俟たねばならないが、「ある人にとって familiar な語は、その人にとって重要な意義をもつ語である」(Noble 1953: 97) や「familiar な意味を持つ外国語の単語は、そうでない単語よりずっと速やかに習得され、定着率もよい。」(Chapman & Gilber 1937: 625) などの心理学の指摘や、身近な教材は生徒の興味を起しやすいく (羽鳥 1977: 263-266) などの motivation の観点からの指摘を考えあわせると、やはり、日本の教

科書における生活語は、少な過ぎるの感を受ける。

もしも、価格からの制約上、これ以上教科書のページ数を増やせず、従って、これ以上総語数を増やすことが不可能であるならば、教師が適切な場面において、少しずつ生徒に必要な生活語を教えたり、又、生活語を豊富に織り込んだ副読本の充実などの対策が考えられるべきであろう。

尚、コンピューターによる処理に関しては、広島大学総合科学部の松尾雅嗣先生及び、広島大学大学院生木下徹氏に、たいへん御世話になった。末尾ながら、深く感謝の意を表したい。

<参考文献>

- Chapman, F.L. & L.C. Gilbert (1937) "A study of the influence of familiarity with English words upon the learning of their foreign language equivalents", *J. educ. Psychol.* 28, 621 - 628.
- 羽鳥 博愛 (1977) 『英語教育の心理学』大修館
- 広島大学教育学部英語教育研究室 (1972) 「西ドイツの英語教育 英語教科書を通して」『英語教育研究』15, 25 - 85
- 稲村 松雄 (編) (1970) 『語い・連語の指導 (講座・英語教授法Ⅶ)』研究社
- 西田ひろ子 (1983) 「米会話入門 日常会話に強くなるには」『受験の英語』8月号, 66 - 67
- 文部省 (1978) 『中学校指導書外国語編』開隆堂
- Noah, H.J. & M.A. Eckstein (1969) *Toward a Science of Comparative Education*, London, Macmillan
- Noble, C.E. (1953) "The meaning-familiarity relationship", *Psychol. Rev.* 60, 89 - 98.
- 沖原 豊編 (1982) 『現代教育学シリーズ8 比較教育学』有信堂
- Sompong Patama (1981) "Japanese and Thai lower secondary level English Textbook: A comparative study" (unpublished)
- 上野 清士 (1982) 『教科書物語』新泉社
- 吉田 一衛 (1975) 「フランスにおける英語教科書の特徴」『現代英語教育』12, 5, 14 - 16
- Rahmen Right Linien Sekundarstufe 1. Neuue Sprachen* (1980) Der Hessische Kuotusminister (中等教育第1段階, 現代語大綱指針, ヘッセン州文部省)